チリ・パタゴニア1968-69 ――ある学生探検の記録 第12回

サン・ハビエル号航海記（その1）

安成哲三 やすなり てつぞう
名古屋大学地球水循環研究センター（気象学・気候学，地球環境学）

イラスト＝安成 晶

この連載は，現在の私ではなく，35年前に学生だった私の書いた記録である．当時，京都大学探検部に所属する学生であった私は，仲間の2人と南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち，そして2年近くを費やして1968年にようやく実現した．帰国後，私はその探検の報告を約半年かけて書き上げた．内容は，探検の思い立ちから帰国まで，私たちは何をやり，何を見聞きし，そして何を考えたかを，あくまで私自身を通して記したものであるが，いくつかの不運が重なり，結局，そのまま35年間，眠り続けることになってしまった．今回，1960年代末の学生による「探検」の記録として，ほとんどそのまま『科学』に，十数回に分割して掲載していただくことになった．

前回（第11回，2月号）は，HPS10氷河地域での調査の後，本来調査するはずであった巨大なピオ11世氷河への偵察や，氷河地帯からの撤収作業を行ったが，その時に起こった，氷が浮かぶフィヨルドでのゴムボート転覆事故で九死に一生を得た体験などについて報告した．ウェリントン島の基地プエルト・エデンに戻った後，モーターボート「サンハビエル号」で，複雑な諸島部の水道を通り抜けて太平洋岸までの数日の小航海を行ったが，その時の報告を2回に分けて行う．

イングレスの険

2月10日．伊藤隆とぼくは，神父，水先案内の漁師と共に「サン・ハビエル」号で出発した．太平洋岸までの諸島部を，石の採集をしながら，5日間の航海旅行だ（図1）．

ボートはメシエル水道を北上する．プエルト・エデンのすぐ北の両岸一帯は一面のシプレ（ひのき）の白骨林となっている．2,30年前に異常乾燥の年があり，その年の山火事によるものだと神父はいう．やがて，イングレスの険にさしかかる．幅2〜3 kmから5〜6 kmはあるメシエル水道が急に狭くなり，1 km足らずになってしまう．その間にさらに小島が散らばり，せいぜい数百mの間を大型船舶も通り抜けねばならない．水深も浅く，ひどいところでは1 m程度．ウェリントン島と大陸の間に南北に200 kmも続くメシエル水道は，プエルト・モントとチリ最南部，マジェラン海峡地方を結ぶ大切な水路となっている．極に近くつねに風と荒波にもまれた船乗りにとって，静かで美しい水路の航海はしばしの慰めとなるが，このイングレスの険だけは緊張させられる．数千t以上の大型船は満潮時しか通れず，エデンにも時々潮待ちの貨物船が停泊する．今までここで座礁した船は非常に多く，プエルト・モント-プンタ・アレナスを往復している定期船「ナバリノ」号もつい最近座礁し，岩に乗りあげてしまった．その時身を軽くするために600袋ものじゃがいもを海へ捨てたという．ある小さな島には，通過の安全を祈ってマリアの像が立っている．が，小

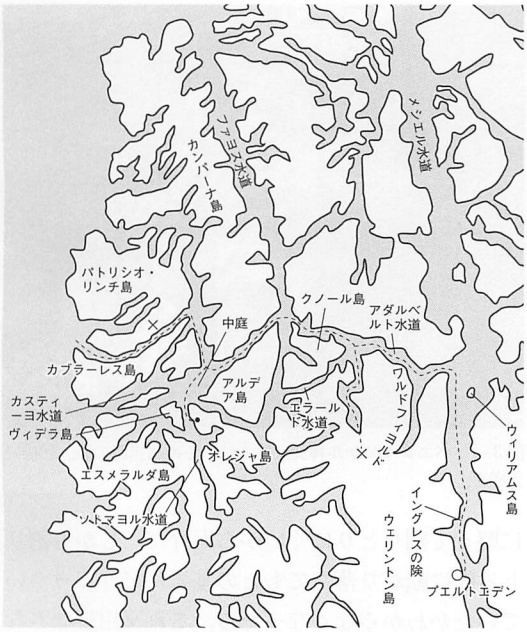

図1――サンハビエル号の航路. ×印は岩石サンプル採取地点. ●は宿営地点.

さなボートにとってはむしろ景勝の地だ．松島見物の気分だ．島をおおいつくすコイウエは松の枝ぶりとよく似ている．

小さな入江に小屋がけがあり，煙があがっている．ひとも見える．チョルゲロだ．チョルゲロとは，チョルガなどの貝を採って煙でいぶし，貝のくん製をつくっているところだ．エデンの漁師やアラカルーフはボートでこの諸島部一帯を放浪し，貝のたくさんいる入江に来ると，簡単な小屋がけを作り，しばらくの間住みつき，貝を採りくん製作りをする．できた貝のくん製は細い縄にじゅずつなぎにする．貝が減ってくると，また次の入江を捜して海を放浪する．くん製はエデンに定期船が来るごとに売りに出す．神父は，干潮時はほとんど岩ばかりになる，幅十数mしかない小島の間をわざと通りぬける．水道はふたたび広くなる．両岸は水際までビッシリと木が生え，わずかに満潮水位以下の部分が岩をのぞかせている．海の方に倒れるように幹がとび出し，枝が水につかっている木もある．背の高いコイウエを中心に，ツツジ科の一種や葉にいばらのあるヒイラギの一種等の灌木類がビッシリ生えている．種類はそう多くない．

ウィリアムス島という小さな島の近くに大きく傾いて座礁したまま放置されている5000t級の貨物船がある．パナマ国籍でコトパクシ号という．去年の5月21日に座礁したという．乗組員は全員他の船で脱出し，船主もそのまま放置している．プエルト・エデンの人々は，以後たびたびやってきてあらゆるものを略奪している．略奪というより，黙って持ち去っているという言い方のほうがよさそうだ．そういえば空軍のポストに，なぜ羅針盤や，FULLとかHALFとか書いた速度盤が飾ってあったかもはたとわかった．砂糖，じゃがいも等の食糧，時計，ラジオ……．単調な生活をしているエデンの人々にとって，このコトパクシ号行きは，大きな楽しみのひとつだ．年末のある日も，空軍ポストの人たち，校長先生，数人の漁師が朝早くこれも略奪した救命ボートで出かけ，翌日の早朝に意気揚々として帰ってきた．「私も行きましたよ」と神父は笑いながら言った．空軍の海賊基地に泥棒校長，泥棒神父か．しかしエデンの人々は，別に悪いこととは思っていない．物資の欠乏しがちなエデンの人々にとって，もはや誰も持ち主もなく眠っているものをそのままにしておくてはない．何か不足すればお互いに頼りあわねばならない状態においては，むしろ自然なことだ．

午後5時半，メシエル水道をはなれ，太平洋岸へとつながっているアダルベルト水道に入る．水道は東西方向に走っているため，多少波がでてきた．この水道を境に北がアイセン州，南がマジェラン州となる．南に深くウェリントン島に入りこんだワルド・フィヨルドの入口が見える．その少し奥にサギが遊んでいる．ボートはワルド・フィヨルドのとなりにある無名の小フィヨルドに入り，約5km走ってどんづまりで投錨する．まったく静かな水面．まわりはビッシリとコイウエの森．ゴムボートを出して偵察にでる．明日はこの付近の露岩地帯まで行って石をとるつもりだ．まわりをぐるっと見まわすと，東岸の森林の奥，高さ100mのあたりに森林が切れて少し露岩が見えている．2人で行ってみる．途中の森の中はまったく陰うつそのものだ．巨大な倒木，大きなシダ，苔，いばらのある灌木，喬木についた着生植物，柔らかく湿った土．空はほとんど見えず，ど

図2——巨大なコイウエに着生植物や苔がついた湿った森林内の様子．伊藤隆氏撮影．

図3——バエレマエケル神父．後ろにいるのは当時の私．伊藤隆氏撮影．

こにいるのかもわからない(図2)．ただ高い方へ高い方へと進む．30分ほどでところどころ岩盤の出ているなだらかな草原にでる．が，こんなのぺっとした岩盤はだめだ．ハンマーとタガネだけで採れるものではない．明日はさらに上の上，800 m の岩尾根まで登らねばならないようだ．

夜，エデンからのラジオ・エカウクは50 km しか離れていないのにまったく入らなかった．ところが500 km 離れたアルゼンチン最南部の町リオ・ガジェゴからの放送は驚くほどよく入る．やはりアンテナの向きによるのだろう．

バエレマエケル神父

2月11日．フィヨルドの東岸の岩尾根へ岩石のサンプリングに出かける．ぼくと伊藤，それに神父も一緒に行くという．原始林を抜け，昨日2人で来た草原に出る．上の露岩地帯まではふたたび急斜面のやぶこぎだ．神父さん，大丈夫かなと思って様子を見るがニコニコ笑って平気な顔をしてついてくる(図3)．エデン付近やエカウク湖付近で悩まされたいばらの木はここにもあり，ぼくたちの前進をはばむ．海抜200 m 付近でやっと露岩に苔が一面にはびこった斜面に出る．全体に湿っている．

さっそく1カ所，サンプルのとれそうな岩を見つける．古地磁気を調べるためのサンプルは基岩でないとだめだ．転石は残留磁気の方向がわからなくなっているので用をなさない．基岩は一般に堅くて割りとりにくいから厄介だ．しかも割りとる際に転がり落ちてもとの基岩にどうくっついていたかわからなくなったら，これ又用をなさない．コツは，ハンマーで割ってもう少しで取れるという状態にしておき，クリノメーターで基岩にあった時の方向を記しておく．そして軽くたたいて割りとる．慣れないとなかなか難しい．苦労してやっていると，横で見ていた神父，「ちょっと私にやらせてくれ」とハンマーを持って手伝ってくれる．2人であっちだこっちだと岩をあらゆるやり方でたたく．「ところで，こんな石とってどうするの」と神父．ほら来た．こんな質問はよくされるだろうと思って，あらかじめ日本にいる時，スペイン語でいかに答えるか考えてはいた．まず，「あなたは大陸移動説というものを知ってますか．即ち，かつては大陸はひと塊だった．それがアメリカ，アフリカ，オーストラリア等と分かれ，……」といって，相手の反応を見る．多くの人はここでへぇーてな顔をして，話は終わりとなる．ところがこの神父，「ああ，知ってる知ってる．本で読んだぞ」．そうくると仕方がない．

「では，古地磁気って知ってますか．即ち，岩石はできる時にその時の地球の磁気を記憶して残すのです．だから石の残留磁気を調べれば，かつての磁極の位置がわかり，……」と苦労して説明しかけると，「ああわかった．それで南米がどう動いたかわかるんだな．なるほど，こりゃあおもしろい．非常におもしろい」．

まったくもの分りの早いひとだ．彼はプエル

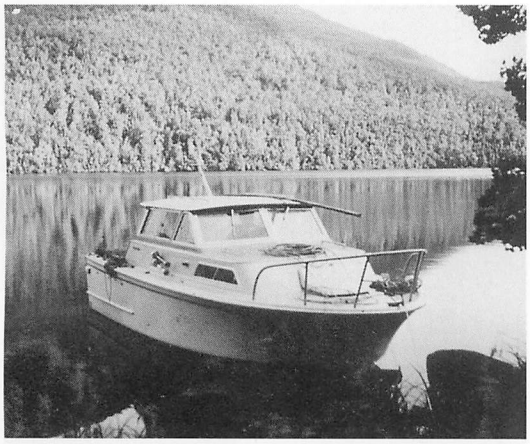

図4――クルーザータイプの日本製モーターボート「サン・ハビエル号」．伊藤隆氏撮影．

ト・モントのサン・ハビエル高校で物理と数学の教師もしている．知識欲も旺盛でもの分りも早い．彼はぼくたちの探検隊にとって忘れることのできない人物のひとりだ．

ラウル・デ・バエレマエケル神父．49歳．ふだんはプエルト・モントにいるが，時々プエルト・エデンにやってきて，付近に住む漁師たちのあいだを回って伝道活動をする．時には300 km離れたバケル川の河口の集落，トルテンまでボートで行くという．チリはカトリック国だから，伝道というよりタイタオ半島以南からプンタ・アレナスまでの広大な人口希薄地帯の教会をひとりで守っている感じだ．そのタフさは抜群で，はじめは六甲隊と一緒に氷河を登り，氷陸を横断するつもりでいたほどだ．その後ぼくたちの計画を知り，チリ南部諸島のモーターボート探検に非常に興味を示して「サン・ハビエル」号を提供してくれることになった(図4)．パタゴニアに関する日本での情報は，彼に依るところが大きかった．

ふたたび出発する．400 m付近から岩尾根となる．ところどころで，コンコンとハンマーでサンプルを取りながら登る．すべて花崗岩だ．

パタゴニアの太平洋側には，大きな花崗岩帯が走っている．

「花崗岩は地質学者にとって，古典的舞台である．その分布の広いことと，ち密な美しい肌理とのために，これほど古くから認められた岩石は少ないであろう．その成因に関しては，おそらく他の岩層より多くの論議のあったものであろう．われわれは，それが岩石を形成する基礎的なものであり，その形成の方向如何を問わず，人間が今まで掘ってみたところでは，この地球の地殻のうちで，最も深い岩層であるのを知っている．どんな事がらでも，人間の知識の極限にあるものは，いちじるしい興味を呼ぶ」と，かつてパタゴニアを訪れたダーウィンは，チリ南部諸島のある高みから，この花崗岩帯をながめ見て，彼の日誌『ビーグル号航海記』に書きとめている．その美しい花崗岩は，大陸移動の証拠をも隠していることだろう．いや，花崗岩の成因自体，南米大陸の移動と密接に関係しているかもしれないのだ．

ぼくたちもまた，1世紀前のダーウィンと同じように，氷蝕を受け，やや丸みを帯びて波うつ花崗岩の山なみを望んでいる．そして，今でもあいかわらず，花崗岩は，ぼくたちの前に神秘なものとして，横たわっている．

眼下にフィヨルドとアダルベルト水道が拡がる．730 mのひとつのピークに登る．岩は妙な節理をなし，ちょうど，食パンをスライスに切ったようにみごとに割れている．急に寒くなり雪までチラついてきたので，早々に引き返す．神父に大丈夫ですかというような意味のことを言うと，「私もあんたたちの頃は，1日に60 kmも歩きましたよ．まだまだなんの」とけんもホロロ．ボートの着岸点までもどると，水先案内の漁師ラウル・レヴィカンが水辺のやぶを切り開いてたき火をして待っていた．夕食に，米，じゃがいも，チョルガ，アヒ(チリ・トウガラシ)を混ぜて煮こんだものをつくっていた．うまい．食後はマテ茶を飲みながら，神父からチリ・パタゴニアにまつわるいろんな話をきいて楽しむ．マテ茶は，チリでは砂糖を入れるがアルゼンチンでは砂糖なしのところが多い．

太平洋へ

2月12日．朝起きても，神父はなかなか，キャビンから出てこない．ミサをたてているのだ．この航海の安全も，きっと祈ってくださっていることだろう．

午前7時．「サン・ハビエル」号は再び出発す

る．アダルベルト水道をしばらく行くと左手，南西方向からエラールド水道が走っている．分岐点の少し手前に小島がウェリントン島とくっつくようにある．小島を目前に見るウェリントン島の海岸のやぶの中にガソリンをデポしておく．帰りの燃料だ．

アダルベルト水道とエラールド水道の間にはクノール島がある．クノール島の東端，即ち2つの水道の分岐点にのぞんでいる端は，陰惨な様相の山がそびえている．高さは800 mほどだが40〜50度の傾斜で海に落ち，まるで溝を掘ったような深くて細い山ひだが数本走っている．急斜面はびっしりと木が生えている．頂上付近を雨雲に隠したその姿は，あたりをさらに暗いものとしている．アダルベルト水道をさらに奥へ進む．12時．南北に走るファヨス水道に出る．ウェリントン島の西岸に沿って走るファヨス水道は，メシエル水道とならんで格好の水路となっている．メシエル水道唯一の難所イングレスの険の測量がまだ精確になされていなかった頃は，時々巡航するチリ海軍の船にとって大切なルートとなっていた．しかし，イングレスの険の測量が精確になされ，大型船にとってもメシエル水道が航行可能になった今，ファヨス水道はまったく見捨てられてしまった．今はただ漁師やアラカルーフの小さなボートがたまに訪れるだけである．水道を横切っていると，小さなペンギンが泳いでいるのにであう．ずっと北の砂漠の港チャナラルで見て以来，久しぶりだ．対岸に小さく開いた水道に入る．カンパーナ島とアルデア島の間の水道だ．ウェリントン島とも離れ，いよいよ太平洋岸も近くなる．この付近の山の高さはだんだん低くなり，メシエル水道に面したあたりでは800〜1200 m位あったのが，400〜800 m位になっている．植生はほとんど変わらないようだが，エデン付近は400〜500 mまで森林，600 m付近まで湿った草地になっているのに対し，この付近になると森林は高くても100 m位，平均的には20〜30 mどまりで，あとは露岩地帯となる．どの露岩も角がとれ丸く磨かれている．水道はだんだんと拡がり，やがてたくさんの島々に囲まれた中庭のようなところに出る．「中庭」からはあらゆる方角に水道がぬけている．このまま西へむかって走り，カスティーヨ水道かベインテウーノ・デ・マーヨ(5月21日)水道を抜ければ太平洋に出られる．いずれも幅が2〜3 kmあり，太平洋からの波と風の影響がかなり奥まできてやや危険だと神父は言う．そこで進路を北にとり，カンパーナ島の西岸に沿った細い水道に入る．折から雨が降ってきた．両岸はうんと狭まり，急峻な岩山が水路を威圧している．岩肌は雨にうたれて冷たく光り，ところどころに滝を滑らせている．空には低く雨雲がたれこみ，遠いところは乳白色のヴェールでおおわれている．完全に世界から忘れられた，地のはての荒涼たる光景にぼくは無性に感動した．ボートの屋根を打つ静かな雨音をききながら，次々に展開する水道の景色をじっと見入っていた．やがて西にまがり，パトリシオ・リンチ島とカブラーレス島の間の非常に細い水道に入った(図5)．幅は狭いところでは20 m位しかない．平均すると，幅50〜100 mで続く．ほぼこのままの幅で太平洋まで抜けている．ボートは速力をおとす．地図で見ると，パトリシオ・リンチ島にはこの水道と平行に2,3本のフィヨルドが太平洋岸から細く入っている．そのうちのひとつは，島の反対側からもフィヨルドが入りこみ，ほんの数百 mの陸地でくびれている．そこは大潮になると両方のフィヨルドがつながり，水道になるという．レヴィカンはかつて仲間と猟に来て，そこをボートで漕いで通った．大潮以外の時は低い湿地になっており歩いて向いのフィヨルドに入れるという．おもしろい話だ．両

図5——太平洋へと抜ける細い水道．伊藤隆氏撮影．

図6——太平洋に面した平原を遠くに望む．海は風が強く波も高い．伊藤隆氏撮影．

岸はさらに低く，300〜400 m 程度の岩山となるが，幅の狭い水道に壁のようになってせまるところもあり，あくまで「地のはてへの道」という感じを抱かせる．神父やレヴィカンに水道の名をきくが無名だという．「カナル(水道)・キョウトがいいじゃないか」と神父．何となくそう呼びたい気持だ．水道を半分ほど来た時，右岸の小さな浜辺に何か白いものが見える．難破したボートの残骸かと思って近よってみると，くじらの死骸だ．長さ 6〜7 m．ほとんど白骨になっている．セミクジラの一種だろうと神父はいう．死骸のすぐ近くの高いコイウエの枝には，はげたかが数頭群がっている．とすると，このクジラは死んでまだ間もないのか．

13 時 50 分．水道は急に右に折れ，幅も広くなる．両岸のコイウエは低く，枝が強風の影響でみな寝ている．いよいよ太平洋も近い．波も出てきた．14 時．今まで両岸にせまっていた岩山が突然なくなり，両岸にはベタッとした広大な平原が拡がっている．平原はところどころに 10 m ほどの小山がポコッとでている．一面，背の低いコイウエの林におおわれているようだ(図 6)．前方には雨に煙る太平洋の水平線が拡がっている．波も，今まで水道内で風波を受けた時のようにフロントガラスにバシャバシャとあたるのではなく，ボート全体を大きく揺らす．太平洋のうねりだ．平原の砂浜にボートをつけようとしたが波が大きくてダメだ．残念ながら平原に足を踏みいれることはあきらめる．うねりにボートは大きくもまれ，やや危険な状態だ．さっそくきびすを返し，ふたたび静かな水道に戻る．これでこの探検のぼくにとっての目的のひとつ，太平洋まで諸島部と水道をぬって行ってみるという目的は一応達成された．なんのためときかれても，答えることはできない．世界に忘れ去られたこの地帯を見てみたい，つきつめていえばそれだけだ．ひとつ，現実的な理由があった．チリ地質調査所から発行された大まかな地質図によると，チリ・パタゴニアを走る花崗岩帯は中生代白亜紀のものとなっているが，一部太平洋岸に近い部分は古生代か先カンブリア代となっている．今走っているパトリシオ・リンチ島，カブラーレス島付近はその一部に入っている．異なる年代の古地磁気のサンプルを取りたい，また本当に異なった年代のものかどうかを質料分析による年代測定法で調べてみたいと思っていたことがその理由だ．静かな水道の適当なところに接岸してもらい，伊藤と 2 人で上陸する．雨は絶え間なく降っている．今日は神父もさすがについて来ない．岸から灌木帯をやぶこぎするとすぐ露岩地帯に出る．植生はエデン付近と大差ないが，大木はすっかりかげをひそめ，コイウエも低く細くなっている．さっそくサンプルを取ろうとするが，岩肌を水が流れ，油性ペンでも赤鉛筆でも印がつけられない．仕方がないので年代測定用にひとかかえの石を拾っただけで帰る．花崗岩だが，確かにエデン付近のと違い，雲母や長石の結晶がばかでかい．

ふたたび「中庭」に出て，今度は南へ向う．イルカがボートにまつわりついてくる．ウェリントン島よりさらに太平洋に近いこのあたりは，海に住む哺乳動物の世界だ．とくにいわゆる毛皮獣は豊富だ．主なものはロボ(あざらし)，ヌートリア，コイプー，ラッコ，きつね等．ヌートリアの毛皮は高く買われる．漁師たちはこれらの動物を追っていく日もボートで諸島部をうろつきまわる．

「サン・ハビエル」号はソトマヨル水道に入り，ヴィデラ島に面したオレジャ島の小さな入江に停泊する．夜に入っても雨は降り続く．ボートの上から小用をすると，静かな水面に夜光虫がキラキラと光って美しい．